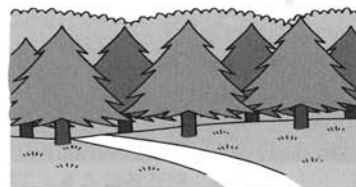


ブナと只見町

只見の自然に学ぶ会代表
只見町ブナセンター主任指導員

新 国 勇



●只見町ブナセンターの発足

今年四月、只見町ブナセンターが発足した。これまでの川のものしり館を「ブナと川のミュージアム」としてリニューアルしブナセンター事務局をおいたのである。専従の職員を新たに三人採用し、町の期待をになう看板施設としてスタートをきった。これは人口五、〇〇〇人の小さな町の大きな決断だった。ここにいたるまでには、さまざまなできごとがあった。「ブナと生



只見町ブナセンターが発足
ブナと川のミュージアムも開館

きるまち・只見」を標榜することになったいきさつを振り返り、町の現状と理念を紹介したい。

●ブナ林の保護運動

高度経済成長まっさかりの昭和四〇年代、日本中のブナ林は、伐採の嵐にさらされていた。拡大造林政策により、ブナなどの広葉樹が皆伐されスギ・ヒノキの人工林に代わっていった。只見町においても同様だった。布沢地区には広大なブナ天然林が残っていたが、年々、山が裸になっていった。地元住民は、洪水被害や土砂くずれを心配していた。四四年八月一二日、それが現実となる。一週間降り続いた雨が保水力の限界を超え布沢川にあふれ出し、未曾有の洪水被害をもたらしたのである。土砂崩れにより人家や耕地がうばわれ、五つの集落が移転を余儀なくされた。

これを機に、町内では議会や行政区が中心となってブナ天然林の保護運動が高まっていった。四八年、町議会は国有林野保全に関する要望を前橋営林局に申し入れた。五五年には、国有林

問題特別委員会が設置され、ブナ林伐採の調査や検討が行われる。これらの運動は、平成の時代になっても続き、保全に関する決議や署名運動が展開されるが、伐採がなくなることはなかった。しかし、平成一四年から状況が変化す。国有林野伐採計画に対して、日本野鳥の会などの自然保護団体が国有林野の保全を申し入れたことに端を発して全国的に保護のうねりが広がった。一五年には、布沢恵みの森が郷土の森に指定され、一九年四月からは只見町を中心とする奥会津一帯の山地が奥会津森林生態系保護地域となり、国内最大の保護林として保全されるようになったのである。

●ブナ林総合学術調査の実施

只見町は、昭和五四年、ブナを町の木に指定している。これはイメージシンボルであり、他と差別化できるものではなかった。そこで、平成一五年から一七年の三カ年間、ブナ林総合学術



平成19年「自然首都・只見」を宣言

調査が実施された。これによって、この地域のブナ林の遺伝子の多様性が非常に高いことが判明した。また、絶滅危惧種クロホオヒゲコウモリの国内一の生息地であることも明らかにされた。

これらの事実は、只見地域のブナ林が分断されずに広域に残った証しである。さらに、渓流域までブナ林が侵入し、トチノキやサワグルミなどと一緒にみごとな溪畔林をつくっており、河畔林では絶滅危惧種ユビソヤナギが自生していることも特色とされた。

●「自然首都・只見」宣言

只見町ではブナ天然林の価値を国内外に知ってもらうため、平成一七年七月、世界ブナ・サミットを開催した。六カ国から研究者が集まり、世界のブナ林の現状について討議した。ブナ林の現地視察も行われ、価値の高い森林であるとの評価を得た。一九年七月、子どもブナ・サミットを開催し、自然の中心地は只見というメッセージを込めて「自然首都・只見」を宣言した。翌二〇年には、第二回世界ブナ・サミットを開催し、その評価を不動のものとした。

いま、町では「自然首都・只見」をキャッチフレーズにして、ブランドの向上と交流人口の拡大を図ろうとしている。このような一連の活動のもとに只見町ブナセンターが生まれたのである。むかしから当たり前につきあっていたブナ林が、町民の誇りとなった今、自然首都が名実ともに実現しようとしている。